



日本語版のためのまえがき

人類の歴史が始まって以来、どのような国々でも軍隊の力は国家の繁栄を計る尺度とされてきた。ペルシャ帝国、ローマ帝国、オスマントルコ、スペイン、フランス、イギリスなどはいずれも、広大な土地を軍事的に征服することで安穩な暮らしを謳歌することができた。そして四世紀ごろの日本の伝説的な武士やマトタケルにしろ、ギリシャ神話に語られる神々の勇ましい戦いにしろ、人々は戦う男たち（そして女たち）に憧れを抱いてきた。

今日では、軍国主義やかましい愛国主義はおおかたの先進国では支持を失っている。二〇世紀は全世界の歴史を通じてもっとも多くの命が失われた世紀だった。このおぞましい一〇〇年のあいだほど、多くの人々がむごたらしい死を迎えたことはない。あんな世紀は二度とくり返されてはならないと、国を問わず、良識ある人々ならば誰もが望んでいるだろう。二〇世紀はまた、想像を絶する破壊力を持つた兵器が発明され、使われた世紀でもあり、特に日本の人々はその証人としてふさわしい。

こうして幸いなことに、今や軍国主義がもてはやされることはなくなった。しかし、軍事的な成功には、広く美德として認められている多くの要素が必要なものも覚えておいてよいだろう。自己犠牲、勇氣、忠誠心、決意などは、偉大な武人の最強の武器である。これらを抜きにしては、どれほど強力な剣や銃をもってしても勝利は得られまい。伝説的な武人たちが各国で語り継がれてきたのも、こうした美德のおかげなのだ。

この点では、日本は第二次世界大戦の初期の展開を大いに誇りとしてよいだろう。日本軍の優秀さは連合国軍を茫然自失させたのだから。白人至上主義といった世迷い事が幅を利かせていた一九四〇年代、人種差別と全くの愚かさが相まって、連合国は目の前の強大な敵を過小評価していたのだ。マレー半島にいたオーストラリア兵たちは、日本兵はひ弱で、近視で、暗がりや怖がると教えられていた。だがそれが間違っていることはすぐにわかった。マレー半島とシンガポールのイギリス、オーストラリア、インドの守備隊一二万五〇〇〇を六万の日本軍が敗走させたのだ。オーストラリアのジャーナリスト、ラッセル・ブランドン（当時二十一歳）はマレー半島で砲手を務めていたが、のちに苦々しく回想した――「われわれも日本軍のような装備を持ち、彼らのように航空隊の支援を受けて、彼らのような指揮官に恵まれ、そして彼らに劣らぬ士気があったならば、大いに戦果をあげられただろうに」。

これから読んでいただく本書は、日本の軍事的な勝利について語っている。オーストラリアの遙か北辺にあるダーウインは、当時は重要な軍事拠点だった。当時のオランダ領東インド――現在のインドネシア――での戦いへ向かう連合国軍の艦艇や航空機の中継点でもあった。したがって日本軍にとっては当然の軍事目標であり、日本軍の攻撃隊は精度と勇気を持って襲い掛かり、恐ろしいほどの戦果をあげた。わずか一〇週間前、真珠湾を攻撃して太平洋戦争の火ぶたを切って落としたのは六隻の空母だったが、そのうち四隻がダーウインの攻撃に参加した。そしてどちらの場合も、同じパイロット、淵田美津雄が攻撃隊を率いた。ダーウインでは真珠湾よりも多くの爆弾が投下され、真珠湾よりも多くの艦船が撃沈され、そして真珠湾よりも多くの民間人が死亡した。当時としては、第二次世界大戦中でも最も大規模かつ破壊的な空襲の一つだった。オーストラリア本土では、今もって史上最大の犠牲者を出した出来事であり続けている――どんな山火事や洪水よりも、どんな飛行機事故よりも、そして先住民のいかなる

大量虐殺事件よりも。

ダーウイン空襲は連合国側から見れば、準備不足と、リーダーシップの決定的な欠如がもたらした悲劇だ。航空母艦から発進した日本軍のパイロットたちは、どのような事態が待ち受けているかを知る由もなかった。ダーウイン上空にはアメリカ軍とオーストラリア軍の戦闘機の大群が待ち受けているだろうか？ 殺人的な対空砲火の弾幕をくぐり抜けるはめになるだろうか……？ 結果的に、彼らを迎えたのは貧弱な装備で、戦う準備もできていない敵であり、任務はなんなく遂行できた。しかし出撃した時点ではそんなことは全く予見できなかったのだ。彼らに勝利をもたらしたのは、彼らの勇気と技量だった。だがそんな勝者たちも、のちには教訓を得ることになった。太平洋戦争の最初の数か月間で日本軍が苦も無く戦果をあげていったことは、自己満足を生み、今度は日本側からの人種的偏見も見られた。連合国軍は墮落していて軟弱で、武士道を身につけた侍の敵ではないと、日本側は思い込んだのだ。しかし彼らはやがて、鉄のような決意と勇気と自己犠牲の精神が日本兵の専売特許でないことを、ニューギニアのジャングルや硫黄島の山の斜面で、多くの犠牲を出しながら思い知るようになった。連合軍も日本軍に匹敵する資質を十分に持ち合わせていたのであり、最後にはその連合国軍が勝利を得た。

本書ではできるだけ客観的かつ公平であるよう心がけた。日本、オーストラリア、そしてアメリカは今や同盟国であり、友人同士だ。しかし共通の歴史を直視し、理解しようと努めない限り、その友情も安泰ではあり得ない。本書がその友情を確固たるものにするために、いくらかでも貢献できることを願っている。

二〇二二年二月

ピーター・グロス

お父さんもびっくりするほどすばらしい作文を書ける、

アヌチュカとタマラへ

フ ラ デ イ 忌々しい町ダーウィン

忌々しい道路はイカれてる
忌々しい住人もイカれてる

「この忌々しい野郎」と誰もが言い合う
ああ、クソ忌々しい町ダーウィンよ。

空には忌々しい雲と雨

石ころだらけの地面には忌々しい排水溝もない
お偉いさんも石頭

ああ、クソ忌々しい町ダーウィンよ。

忌々しいほどぼったくられて

忌々しいビールに大金はたく

「お味はいかが」だと？ このクソつたれ

ああ、クソ忌々しい町ダーウィンよ。

映画館はクソおんぼろで

おんぼろ座席はクソ寒い

それでも料金クソ高い

ああ、クソ忌々しい町ダーウィンよ。

忌々しいダンスにやにんまりするが

忌々しいバンドはド素人

これじゃ踊るに踊れない

ああ、クソ忌々しい町ダーウィンよ。

忌々しいスポーツもゲームもなけりゃ

忌々しい浮気女もいやしない

クソもつたいぶって名も告げず

ああ、クソ忌々しい町ダーウィンよ。

忌々しい氷枕を友に

忌々しいベッドで寝てるが一番

すると「クソつたれめ死んだか」と大きなお世話だ

ああ、クソ忌々しい町ダーウィンよ。

凡例

- 一、本書は“An Awkward Truth: The Bombing of Darwin, February 1942” (Peter Grose, Allen & Unwin, Australia, 2009) の全訳である。
- 二、原文には資料や証言の引用中、「」の形で著者が情報を補足または訂正している箇所があるが、訳文では「」の形とした。
- (例) [Union] office = 「組合の」事務所
- 三、訳文では史実や人名・地名などについて、必要と思われる場合は「」の形で訳者が適宜情報を補足した。
- (例) 急降下爆撃機「ヴァル」^{〔九九式艦上爆撃機〕}
- なお、海外の人名・地名など固有名詞の表記は、原則的に今日一般的に通用している表記を優先して採用した。
- 四、原文におけるイタリックによる強調は、訳文では傍点で示した。また、原文で引用される資料などで、大文字だけで表記された文言や文章は、訳文では原則的に太字で示した。その他の表記をする場合は、訳文中「」の形でことわり書きを入れた。
- 五、原文の巻末注は、訳文でも巻末に「注」としてまとめて掲載した。

一九四二年二月一九日、オーストラリア北部の中心都市ダーウインを日本軍が空襲——私は本書執筆のために取材を始めて、すぐにあることに気づいた。それは、この歴史的出来事には全く異なる二つの側面があるということだった。

その一つは、オーストラリア準州大臣ポール・ハスラックが行った演説（一九五五年三月三日）に端的に言い当てられている。空襲では市中心部にあったダーウイン郵便局が被弾し、多くの市民が亡くなった。その犠牲者たちを悼む記念碑の除幕式で、ハスラック大臣は立法評議会議員たちを前に、次のように述べた——（二月一九日は「わが国民の栄光の記念日ではなく、恥辱の日である。オーストラリアの国民は、なすすべも知らずに逃げ出したのだ」。これこそ最もよく知られ、かつ、私たちオーストラリア国民のおおかたの理解となっている一面である。私自身、日本軍の特殊潜航艇によるシドニー港攻撃（一九四二年三月三日）を描いた前著『唐突なる目覚め』（“A Very Rude Awakening”）のなかで、同じような立場からダーウイン空襲に言及した。私は、空襲後のダーウインは略奪や集団脱走によって無政府状態に近い事態に陥ったと述べた上で、「オーストラリアの歴史のなかの恥ずべき逸話だ」と書いた。

しかし、ダーウイン空襲について調査を始めると、私は別の一面を見いだした。確かにパニックも起きたし、役立たずの連中もいた。空襲のさなか、あるいは事後に、町を逃げ出した人たちもいれば、略奪に手を染めた者もいる。だがその一方で、オーストラリア軍の対空砲部隊の砲手たちが秩序だった

反撃を根気強く加え続けたのも事実である。また、勇敢に戦ったアメリカ陸軍航空隊のパイロットたちも称賛に値する。圧倒的な戦力で迫り来る日本軍の航空部隊に対し、彼らはわずか数機で真っ向から立ち向かい、大空に散った。ダーウイン港では、停泊していたアメリカ海軍の駆逐艦ピアリーがアメリカの軍事史に不朽の名を刻んだ。日本軍の急降下爆撃機の猛攻を受けながら、ピアリーの乗組員たちは最期まで堂々たる抵抗を続けたのだ。そして、埠頭にいたオーストラリア人の救助隊員たちも忘れてはならない。敵機の機銃掃射のなか、攻撃を受けた艦船が港内で次々と大爆発を起こすものともせず、彼らは漏れ出た石油が燃えさかる海上から同僚たちを救い出した。その英雄的な活躍には、どのような賛辞のことばも及ばない。

ダーウインを襲った日本軍の第一波の攻撃隊は、航空母艦の艦載機を中心としていた。それはまさに一〇週間前に真珠湾を襲撃した部隊そのものだったと言えるだろう。だが、この点はこれまでほとんど注目されてこなかった。どちらも同じ飛行隊長・淵田美津雄が率い、同じ航空母艦から発進し、搭乗員らも同じだった。ただ、ひとつだけ違いがあった。ダーウイン空襲の場合、軍艦の大砲ではなく艦載機で爆撃を加えるという革命的な戦法は、真珠湾ですでに実証済みだったということだ。日本軍は真珠湾では失敗も犯したが、ダーウインではくり返さなかった。ダーウインへ向かった第一波の攻撃隊には、真珠湾攻撃を上回る数の航空機が参加した。投下された爆弾の数も真珠湾を凌駕した。そしてダーウイン港では、真珠湾よりも多くの艦船が撃沈された。また、ダーウインに飛来した第二波の爆撃隊は、空母の艦載機ではなかった。地上の基地から出撃した、より大型の爆弾を積んだ、より大型の陸上爆撃機だった。

ダーウインの市街地と市民は第一波の空襲で甚大な被害を受けた。この点も、真珠湾にほど近いホノ

ル市街地で被害が少なかったのとは対照的だ。ただ、真珠湾自体では多くの犠牲者が出て、ダーウィンはこれを下回った。その理由は単純だ——殺そうにも、ダーウィンはそもそも住人が少なかったのだ。それでも当時、都市への空襲としては第二次世界大戦が始まって以来最大級のもので、爆撃の規模の上でも犠牲者数でもイギリスのコベントリーに対するドイツ軍の空襲に匹敵した。「工業都市コベントリーは一九四〇年二月四日、五〇〇機近いドイツ軍機による空襲で、数百―五百数十人と推定される死者を含め約一〇〇〇人が死傷し、工場や住宅地も壊滅的な被害を受けた。なお、日本軍も主として一九三九年以降、中国の重慶に対し断続的に大規模な都市爆撃を行っていた。」

ダーウィン空襲はこれまでほとんど語られることがなかった。そのためあまり知られていない。北部準州大学の歴史学者アラン・パウエル教授は著書『ザ・シャドーズ・エッジ』で次のように書いている。

ダーウィン空襲は、直接的にはオーストラリア国民にほとんど衝撃を与えなかった。それは、ひとつには政府が真実を明かさなかったからであり、もうひとつには、あるアメリカ人が指摘したように、「おおかつたのオーストラリア国民にとって、ダーウィンは全く見知らぬ町で、国土の遥か北西の辺境、さながらこの世の果ての土地」だったからだ。

拙著『唐突なる目覚め』で、私は日本軍の特殊潜航艇によってシドニー港が攻撃された事件を一種の茶番劇として描いた。双方で二七名の尊い生命が失われたことは事実だが、関係者たちのあまりの無能ぶりを見れば、大まじめに語れというほうが無理というものだ。だから読者の笑いを誘うことに、私は何の戸惑いも感じなかった。だが本書ではそうはいかなかった。端的に言って、ダーウィン空襲はオーストラリア国内で起きた出来事としては史上最大の犠牲者を出した事件なのだ。日本軍がダーウィンで殺害した人数は、オーストラリアを襲ったいかなる暴風雨、山火事や洪水、鉄道や飛行機の事故、ある

いは先住民アボリジナルの大量殺戮事件キョウリクの犠牲者数をも上回る。二〇〇七年七月、私は友人のメアリとヴァン・マキューンと一緒に、ダーウィン南郊の町アデレード・リバーにある戦没者墓地を訪れた。そこに、ダーウィン空襲の犠牲者の多くが眠っている。私は友人たちから離れ、あてもなく一人で墓地を歩いてみた。そしてあの二月一九日の空襲で命を落とした海軍や商船の名もない水兵や船員たちの墓や、ダーウィン郵便局で犠牲になった市民に捧げられた記念碑を見て、胸が詰まった。

オーストラリア戦争記念館が公刊した第二次世界大戦中のオーストラリア陸軍の公式記録は全七巻、何千ページにも及ぶ。しかしダーウィン空襲には申しわけ程度に二ページを割いているに過ぎない。この出来事がいかにオーストラリアの現代史のなかで軽視されてきたかは、オンライン無料百科事典「ウィキペディア」——内容にはばらつきがあるが、インターネット利用者には貴重な情報源としておなじみだ——を見てもよくわかる。航空母艦を主体とする日本軍の機動部隊は、最初に真珠湾を、続いてダーウィンを壊滅させたが、一九四二年六月四日にミッドウェーで報いを受けることになった。ところが「ウィキペディア」(英語版)のミッドウェー海戦に関する記述によれば、機動部隊は真珠湾からミッドウェー海戦までの六か月間には、取り立てて言うほどの作戦行動はしていないとされている。ダーウィンとコロロンボ現在のスリランカ、当時「の英領セイロンの首都」に対し、「ちよつとした嫌がらせ程度の空襲」を行ったに過ぎないのだそうだ。何ともたいそうな「ちよつとした嫌がらせ」と言うべきである。「ウィキペディア」(英語版)の「記述は現在では削除されている」。



オーストラリア全図



本書の舞台

本書は、二〇〇九年にオーストラリアで刊行された“An Awkward Truth: The Bombing of Darwin, February 1942”の全訳である。

一九四二（昭和一七）年二月一九日、日本軍がオーストラリア北部の港湾都市ダーウィンを空襲した。第一波の攻撃隊は、連合艦隊機動部隊の空母四隻から発進した空襲機と戦闘機一八八機。さらに陸上基地の航空隊からも空襲機五四機が出撃し、第二波の攻撃を行った。わずかに二か月余り前の真珠湾攻撃に匹敵する大規模な作戦で、オーストラリアの市民や同国軍およびアメリカ軍の将兵ら約三〇〇人が犠牲になった（正確な犠牲者数は確定されていない）。

日本から見れば、オーストラリアは当時のオランダ領東インド（現在のインドネシア）など、日本軍が攻略を目指す地域に対する連合国側の反攻の拠点になると考えられていた。このため、オーストラリア北部の港湾都市や空港などが攻撃目標とされたのである。

日本軍によるダーウィン空襲と、それに引き続く一〇〇回近くにもぼるオーストラリア北岸の諸都市への空襲については、日本でもあまり知られていない。かくいう訳者の私も、真珠湾攻撃に至る一〇年間の現代史を追ったドキュメンタリー番組の制作に従事した経験や、オーストラリアを経由して太平洋の戦場へ出撃したアメリカ兵の回想録を訳出したことがありながら、日本軍によるオーストラリア空襲については漠然とした知識しかなかったのだから不明を恥じるしかない。日本で太平洋戦争初期の歴

史を語る時、緒戦の真珠湾とマレー半島への攻撃から、香港、シンガポール、ジャワ島、フィリピンなどアジア各地の攻略、そして趨勢（すうせう）を連合国側の反攻へと逆転させた一九四二年六月のミッドウェー海戦へ……というのがいわば「定番」の筋書きだろう。ここではダーウィン空襲は歴史の彼方へかすんでしまうのである。

実はオーストラリアでも、ダーウィン空襲について知る人は少ないという。この邦訳書が刊行される二〇一二年は、図らずもダーウィン空襲からちょうど七〇年という節目の年に当たる。追悼式典などは毎年行われてきたが、テレビで生中継された今年の式典などの映像を見ても、この史実が「オーストラリアの現代史のなかで——そして国民の意識のなかで——正当な位置づけを与えられてこなかった」と異口同音に述べるダーウィン市当局者や来賓（らいひん）のあいさつが目についた。オーストラリア国内でも認知度が低い理由の一つは、空襲後の住民や将兵の大量脱出や市街地での略奪の横行など、その混乱ぶりが国辱的だったとの見方もあって、関係者がその後口をつぐんでしまったという事情もある。しかしもう一つの理由としては、首都キャンベラや、シドニーやメルボルンなど南東部の大都市の住民にとって、ダーウィンがあまりにも縁遠い北辺の地であったことも挙げられよう。

本書でも述べられているように、酷暑や豪雨など厳しい熱帯性気候のダーウィンとその周辺の地域は決して住みやすい土地ではなく、入植と開発は遅れがちだった。このため二〇世紀初頭にオーストラリア連邦が成立した後も、「州」ではなく連邦政府直轄地となった。中央から派遣される「行政官」の統治のもと、この地域の住民らは自治政府も議会も持つことなく、激しい労働争議や、アボリジナルや移民労働者に対する差別など、多くの問題を抱えたままアジア太平洋戦争の時代を迎えることになったのだ。日本軍による空襲に充分に対処できなかった背景には、こうした政治・経済的、さらには文化的

な統合の遅れもあったと言えよう。この地域は戦後三〇年以上を経た一九七八年、ようやく「準州」となって自治権を獲得し、今日に至っている（「特別地域」とも訳される。原語はterritory。本邦訳書では準州とあって以降は「北部準州」、それ以前は「ノーザン・テリトリ」として区別した。二一世紀に入り、鉱工業、石油、観光などの産業が好調で、中国との貿易も盛んに推進するなど地域の特性を活かしているが、今年のダーウィン空襲追悼式典でのあいさつに見られるように、まだまだその歩んできた足跡は十分に認識・評価されていないのが現状ではないだろうか。

もちろん、すべての人がすべての史実を知ることなどできるはずはない。第二次世界大戦、あるいはアジア太平洋戦争に限ってみても、世界各地でさまざまな戦闘や軍事作戦が繰り広げられ、規模の大小を問わず多くの人々が痛ましく過酷な運命に出会ったのだ。（おそらくは、人類の歴史を決定的に変えてしまった原爆投下を別にして）そのどれか一つだけを殊更に特別視することはできない。しかし、何かの縁やきっかけがあつて、特定の戦闘や事件について知り、学び、考えることは決して無駄ではないはずだ。私たちが知るべきことは、戦況の推移や、大規模な戦闘や出来事に関する一般的な知識やデータばかりではない。特に戦争体験を持つ世代が少なくなってきた今、書物を通じて戦争のさまざまな実態を知ることがますます重要になっている。そうした意味では、（太平洋戦争の大きな流れを考える上では重大な出来事ではなかったかもしれないが）ダーウィン空襲について具体的に史実や証言を掘り起こし、後世に語り継ぐ本書も、貴重な一冊と言えるだろう。

◆ ◆ ◆
本書の著者ピーター・グロス (Peter Gross) 氏は、オーストラリアの大手新聞社の記者を皮切りに、

かのメディア王ルパート・マードック傘下の全国紙ジ・オーストラリアンの編集次長やロンドン特派員などを歴任した。さらに、出版エージェンツや編集者、出版社の重役などとしてイギリスとオーストラリアとを行き来して、出版エージェンツ会社を興したこともあるというなかなかの行動派だ。その後、執筆活動に入り、二〇〇七年には、日本軍が特殊潜航艇でシドニー港を攻撃したという、これまた私たちが日本人でもなかなか知らない軍事作戦に関するノンフィクション“A Very Rude Awakening: The night the Japanese midget subs came to Sydney Harbour”（未邦訳。タイトルを直訳すれば「唐突なる目覚め——日本の小型潜航艇がシドニー港へやって来た夜」となる）を著し、好評を得ている。

本書に先行する右のノンフィクションは、ダーウィン空襲から三か月余り後の、一九四二年五月三日深夜から六月一日未明にかけて（ミッドウェー海戦のまさに数日前である）、日本海軍の特殊潜航艇（母艦の潜水艦から発進する二人乗りの小型潜水艦）二隻がシドニー港に潜入したという出来事の顛末を語ったものだ。この際も、ダーウィン空襲の時と同様、オーストラリア軍やアメリカ軍の警戒感（てんまつ）は薄く、事前に飛来した日本軍の偵察機を友軍機と勘違いして手を振って見送った上に、港内に敷設されていた防御網に阻まれた特殊潜航艇一隻の自爆をきっかけに、シドニー港は大混乱に陥ることになる。こうした一夜の騒動を、グロス氏は悲喜劇として描き出している。

この戦闘で、オーストラリア側は兵員の宿泊艦となっていた改造客船クッタブルの轟沈（こうしん）によって二一名の犠牲者を出した。一方で日本側は、停泊中だったアメリカ海軍の重巡洋艦シカゴという、この夜最大の標的に対する魚雷攻撃に失敗し、自爆や雷撃などで三隻の特殊潜航艇すべてを喪失。乗員六名全員が戦死した（なお、この特殊潜航艇は後の「人間魚雷」回天と異なり、初めから生還を期さない「特攻」を目的としたものではないが、決死の作戦であったことは間違いない。シドニーの海軍司令官は日本兵の武勇を讃え、発見された四名

の遺体は海軍の手で丁重に火葬され、遺灰は日本に返還された。残る二名については、乗りこんでいた特殊潜航艇の残骸ざんがいが二〇〇六年にシドニー沖の海底で発見され、日豪合同の追悼式典が営まれた。

誤解を恐れずに言えば、日豪どちらにとっても不本意な結果に終わった七〇年前のこの一夜の戦闘を、なぜ一冊の書物を費やしてまで描いたのか。硬直した組織や権威主義、年来の慣習と思ひ込みなど……それらが危機にあたって臨機応変な対応を妨げたことを、グロース氏は具体的に論証する。特に司令官など上層部に対しては、辛辣で風刺の効いた舌鋒鋭く、容赦なくその失態を暴いている。忘れられていた史実のなかから、戦争が人々に強いる異常な心理や過酷な体験、そして今日の私たちにも通じる人間の営みとその生々しい姿を描き出しているのである。そして、この戦闘を一種の茶番劇のように描きながらも、その犠牲者を「わずか二七名」などと片付けることなく、なぜ、いかにして、これら尊い生命が失われたのかをグロース氏は問うている。こうした著者のスタンスと軽妙なスタイルは、本書『ブラディ・ダーウィン』にも継承されている。



本書によって、私たちは、ダーウィン空襲という太平洋戦争の「知られざる」史実について、詳しく知ることができるようになった。管見によれば、類似の書籍は日本では他に見当たらない（海外文献については巻末の参考文献一覧を参照されたい）。

時代は大きく変わり、今や日豪は友好国である。両国の関係は外交上のみならず、盛んな貿易や人的交流など、経済・文化の面でもますます重要になっている。こうしたなかで、今この一冊の本を読む意味について、改めて考えてみたい。

著者グロース氏は、本書が日豪の相互理解の一助となることを期待すると、「日本語版のためのまえがき」で語っている。そのことは、この邦訳書刊行に携わった者一同の願いでもある。私たちは、あの戦争を不問に付して、「新しい関係」「新しい時代」を標榜することはできない。あの戦争は日本によるアジア太平洋地域への侵略戦争であったと同時に、植民地主義・帝国主義政策を採る各国による覇権争いという側面もある。グロース氏も指摘しているように、国家のために命を賭して戦うことで、兵士たちは賞賛を浴びてきたし、国際紛争の解決手段としての戦争を是認している多くの国々においては、現在でもそれは美德とされている。その点では、ダーウィン空襲を敢行した日本の攻撃部隊も、オーストラリアの防衛部隊も、国家のためによく敵を倒し、よく戦ったことになる。この世界から戦争やテロ行為がなくなることは万民の願いに違いないが、具体的な戦争やその歴史を考える時、一筋縄には行かない。しかし、勇敢に戦って英雄視される兵士たちの陰で、戦争によって多くの銃後の市民が家族や財産や、みずからの生命までも失っていることも忘れてはなるまい。ダーウィン空襲でも多くの一般市民が犠牲となり、遺族にとって、「日本兵も祖国のために勇敢に戦ったのだ」と割り切って賞賛するのは容易ではないはずだ。日豪両国とその国民が真の友好関係を築いていく上で、振り返りたくない過去ではあっても、それを直視し、痛ましい歴史を乗り越えていくことは避けて通れない作業である。

この点では、戦後ある程度の年数が経ったことは、逆に利点でもあろう。今や日本人の学生たちにオーストラリアは人気の留学先・旅行先である。一方、オーストラリアも、かつての白豪主義を捨ててからすでに約四〇年、アジア諸国へ熱い視線を投げかけて、日本語を含むアジアの諸言語の教育も促進している。アジア太平洋戦争をめぐることは、しばしば政治家や著名人の発言によって持ち上がる歴史認識の問題や、従軍慰安婦をはじめとする戦争被害者の賠償・補償に関することなど、外交問題ともなり

得るような課題は数多い。しかし市民レベルでは、互いの立場を尊重する信頼関係の上に立って、率直に真実を探り、語り合うこともできる時代になりつつあるのではないだろうか。そうした意味でも、アジア太平洋戦争など遠い昔の出来事に思える若い世代の人たちにも、本書が今一度日蒙の歩んできた足跡について考えるきっかけとなることを願っている。

次に、本書の訳出にとりかかる直前に、東日本大震災が発生したことにも触れておきたい。というのも、それによって私たち日本人が本書を読む意味に、新たな一面が加わったと思えるからである。エネルギー政策や、さまざまな「安全神話」、地域社会の生活や高齢化の問題など、今、この国の在り方や私たちの認識は大きな変革を迫られている。この国が、今後再び未曾有の危機に直面した場合、迅速かつ適切なリーダーシップが発揮されるか、情報の開示や伝達はどうあるべきか、市民の備えは大丈夫かと、多くの課題がある。本書は、空襲後にドーウインの町が大混乱に陥った原因として、「想定外」の危機に対する視点を欠いた防衛態勢の不備、行政や軍におけるリーダーシップの欠如、情報・通信網の崩壊と不確かな情報の流布などについて述べている。これらは過去における対岸の火事ではなく、大震災後の日本に生きる私たちにとって、示唆に富む先例と言えるのではないだろうか。



ここで、本書の訳出上の留意点について、一、二点お断りしておきたい。

まず、本書には、オーストラリアの政治や歴史に関することや大戦中の戦闘・兵器にまつわることなど、私たち今日の日本人の多くにとってなじみの薄い史実や固有名詞がしばしば登場する。これらについては、凡例にも記したとおり、訳注として適宜補足の説明を加えてある。ただし、戦闘機や軍艦など

の性能や装備については、型式や年代などによって違いも出てくるため、原則的に原文のとおりとした。また、人名・地名などのカタカナ表記は、原則として通用のものを採用した。

日本軍の作戦や戦いの経緯、データなどについて原文に疑問がある場合は、著者に問い合わせた上で、日本の公刊戦史と言うべき『戦史叢書』（防衛庁防衛研修所戦史室著、朝雲新聞社刊）などを参照し、必要に応じて訳注を付した。ドーウイン空襲については、主として次の二巻に記されている。

・『戦史叢書 蘭印ベンガル湾方面海軍進攻作戦』

・『戦史叢書 海軍航空概史』

次に、日本軍の攻撃隊長・淵田美津雄中佐（当時）の回想などについて、原文では主として『ミッドウェー』（淵田美津雄・奥宮正武共著、一九五一年初版、一九六七年改訂版、出版協同社。一九九九年、PHP文庫。二〇〇八年、学研M文庫）の英訳書（“Midway: The Battle That Doomed Japan, The Japanese Navy's Story”, Naval Institute Press, Annapolis, 1955）から引用されている。しかし、この英訳書はアメリカの読者のために大幅に再編集されたもので、日本語の初版とも改訂版とも厳密には一致しない記述が多い。このため今回は、淵田氏の日本語原文を参照しつつ、右の英訳書の英文から独自に和訳したことをお断りしておきたい（ただし英訳書の明らかな誤訳は訂正し、必要と思われる場合は訳注を付した）。なお、淵田氏には戦後にいくつかの著作があるが、右記以外のものとして次の二冊を挙げておきたい（ただし、後者には残念ながらドーウイン空襲に関する記述がない。膨大な手記の一部を編集して刊行したとのことなので、淵田氏の原稿になかったのか、編集の都合で含まれなかったのかは不明である。なお、この自叙伝には、淵田氏が戦後、渋谷駅前で米国人宣教師から小冊子を受け取ったのをきっかけにキリスト教に入信したエピソードや、米国へも伝道の旅をした後半生も語られており興味深い）。

・『真珠湾攻撃』（淵田美津雄著、一九六七年、河出書房。二〇〇一年、PHP文庫）

最後に、この邦訳書が刊行されるまでには、多くの方々の協力があったことを記しておきたい。まず、オーストラリアで本書と出会い、邦訳を提案されたのは出口康夫・京都大学准教授であり、そのアイデアを実現すべく奮闘されたのは大隅書店の大隅直人氏である。そしてお二人の知人で、訳者にとっては大学やNHK時代の先輩である喜多千草・関西大学教授からお声掛け頂き、訳出の運びとなった。このように縁あって機会を頂いたことに、心より謝意を表したい。デザイナーの加藤恒彦氏ほか、校正者の上念薫さん、大林和子さんや、組版者の田中聡さんなど、専門家のみなさんとで本作りにあたり、指揮官として采配を振るってくれた大隅氏には、訳出の各段階で、方向性やアイデアなどを話し合い、練り上げていく機会も頂き、感謝の念に堪えない。原文に関する疑問点などについては、著者のグロース氏と電子メールでやりとりを行い、データの出版など細かな点についても逐一丁寧な回答を頂戴した（また、著者が「探偵顔負け」と言うゴードイ・バーケット氏も、一部新たに探偵ふりを發揮してくれた）。グロース氏には「日本語版のためのまえがき」を書き下ろして頂き、「謝辞」の末尾も改訂して新たに日本語版の関係者に言及して下さるなど、暖かいご配慮を頂いた。改めて御礼申し上げたい。なお、私事になり恐縮だが、訳業に対する家族の理解と協力にも感謝している。

そして何よりも、この邦訳書を手にとり下された読者のみなさんに、御礼を申し上げたい。ダーウィン空襲は、あの巨大な歴史のうねりとも言うべきアジア太平洋戦争のなかにあつては、それほど

「重大」な出来事ではないかもしれない。しかし、空母四隻をはじめとする連合艦隊機動部隊の艦艇と、日本軍機二百数十機が参加したこの作戦で、約三〇〇人の生命が失われたのであり、日本軍がオーストラリア大陸で最初の戦死者と戦争捕虜を出したのもこの時のことだった（捕虜第一号となった豊島^{トヨシマ}一^{いち}等飛行兵については中野不二男氏の秀逸なノンフィクション『カウラの突撃ラップ』〔一九八四、文芸春秋。一九九一年、文集文庫〕がある）。ダーウィン市は現在、「オーストラリアの最前線」（Frontline Australia）というキャンペーンを通じてダーウィン空襲の経緯や影響、歴史的意義などについて啓発・教育に力を入れている（www.frontlineaustralia.com.au）。特に七〇周年に当たる今年には、各種追悼式典に加え、ドキュメンタリー番組の制作や、コンサート、サッカーの試合、学生の絵画展など、二月一九日の前後二週間にわたって行事が目白押しである。近年、ダーウィン空襲の追悼式典は国民意識の高揚やオーストラリア軍の顕彰に利用され、その一方で港湾労働者ら市民の犠牲や、アボリジナルや中国系のマイノリティの歴史が軽視されているとの興味深い指摘もある（鎌田真弓・名古屋商科大学教授の論文「ダーウィン空襲…公的記憶の再構築」<http://cml.ac.jp/naid/110007197375>）。そうした新しい課題も含め（本書でもグロース氏が一部で言及している日系住民の動向についても同様だろう）、本書がこの小さくも大きな歴史的事件について、関心を持って頂くきっかけとなれば幸いである。

二〇一二年二月一九日

ダーウィン空襲から七〇年目の日

著者略歴

ピーター・グロース

(Peter Grose)

オーストラリアの大手全国紙ジ・オーストラリアンのロンドン特派員・編集次長を務めたのち、出版エージェント、編集者などとしてオーストラリアとイギリスの両国で活躍。その後、日本軍の特殊潜航艇によるシドニー港攻撃（1942年5月）を扱ったノンフィクション“*A Very Rude Awakening*”（2007年）を執筆。日本の連合艦隊機動部隊によるダーウィン空襲（1942年2月）を扱った本書“*An Awkward Truth*”（2009年）がオーストラリアでベストセラーとなった。現在フランス在住。

訳者略歴

伊藤 真

(いとう・まこと)

1988年京都大学文学部卒業。NHKの番組ディレクターとして日本史・現代史などの番組制作に従事し、大型ドキュメンタリー番組「真珠湾への道1931-1941」（2002年）を最後に、フリーランスの翻訳家・番組ディレクターとなる。訳書に、『告白』（C.R. ジェンキンス著、角川文庫、2006年）、『ペリリュー・沖繩戦記』（E.B. スレッジ著、共訳、講談社学術文庫、2008年）、『インド特急便！』（D. ラク著、光文社、2009年）ほか、共著に『近衛家の太平洋戦争』（NHK出版、2004年）、『宋姉妹』（角川文庫、1998年）などがある。2012年佛教大学大学院文学研究科修了（文学博士）。

ブラディ・ダーウィン

——もうひとつのパール・ハーバー——

2012年6月10日 第1刷発行

著者 ピーター・グロース
訳者 伊藤 真
発行者 大隅直人
発行所 大隅書店

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜2-1 コラボしが21 407号

電話 077-523-7773

振替 00930-9-272563

<http://ohsumishoten.com/>

組版者 田中 聡（TSスタジオ）

校正者 上念 薫 大林和子

装幀者 加藤恒彦

印刷所 共同印刷工業

製本所 藤沢製本

協力 清田一真

© Makoto Ito 2012 Printed in Japan

ISBN 978-4-905328-02-5



Dies ist ein WWF-Dokument und kann nicht ausgedruckt werden!

Das WWF-Format ist ein PDF, das man nicht ausdrucken kann. So einfach können unnötige Ausdrücke von Dokumenten vermieden, die Umwelt entlastet und Bäume gerettet werden. Mit Ihrer Hilfe. Bestimmen Sie selbst, was nicht ausgedruckt werden soll, und speichern Sie es im WWF-Format. saveaswwf.com

This is a WWF document and cannot be printed!

The WWF format is a PDF that cannot be printed. It's a simple way to avoid unnecessary printing. So here's your chance to save trees and help the environment. Decide for yourself which documents don't need printing – and save them as WWF. saveaswwf.com

Este documento es un WWF y no se puede imprimir.

Un archivo WWF es un PDF que no se puede imprimir. De esta sencilla manera, se evita la impresión innecesaria de documentos, lo que beneficia al medio ambiente. Salvar árboles está en tus manos. Decide por ti mismo qué documentos no precisan ser impresos y guárdalos en formato WWF. saveaswwf.com

Ceci est un document WWF qui ne peut pas être imprimé!

Le format WWF est un PDF non imprimable. L'idée est de prévenir très simplement le gâchis de papier afin de préserver l'environnement et de sauver des arbres. Grâce à votre aide. Définissez vous-même ce qui n'a pas besoin d'être imprimé et sauvegardez ces documents au format WWF. saveaswwf.com



SAVE AS WWF, SAVE A TREE